

円山派衣裳画と三井家小袖の研究  
A Study on Sketches by the Maruyama School Painters  
and Kosodes Owned by the Mitsui Family

近藤 尚子\*<sup>1+</sup>, 佐々木 丞平\*<sup>2+</sup>, 樋口 一貴\*<sup>3+</sup>, 田中 直人\*<sup>1+</sup>, 岡島 奈音\*<sup>1+</sup>  
Takako Kondo\*<sup>1+</sup>, Johei Sasaki\*<sup>2+</sup>, Kazutaka Higuchi\*<sup>3+</sup>, Naoto Tanaka\*<sup>1+</sup> and Nao Okajima\*<sup>1+</sup>

\*1 文化女子大学服装学部 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Faculty of Clothing Science, Bunka Women's University,

3-22-1 Yoyogi Shibuya-ku, Tokyo, Japan

\*2 京都国立博物館

Kyoto National Museum

\*3 三井記念美術館

Mitsui Memorial Museum

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : It is natural that the twenty-nine sketches, owned by the Mitsui Family are thought of as a set. However, close examination of the sketches reveals that there are some variations in their construction and touch. We surmise that the sketches were not made by one person in one period, but by several painters over several periods and then put together. In addition we investigated each sketch from a social point of view. After three years of study, we could not find sufficient evidence to prove that the Maruyama School painter took part in the production, but we can conclude that the construction of the sketches was influenced by the unique spatial consciousness of Okyo Maruyama. In the future, based on the method which we established in this study, we will attempt to view costumes from early modern to modern times from various angles.

要旨: 三井家より伝来した総計 29 件のきもの型原寸大下絵は一群の資料として扱われるべきものである。ただし、実見調査から構成や筆致に様々な相違があることが伺える為、一人の人間によって一時期にまとめて作られたというよりは、複数の手によって制作されたものの集積であると考えられる。3 年間にわたり、個々の「下絵」の分析や「下絵群」を取り巻く社会状況について多面的な考察を行った結果、円山派絵師の直接的な関与を裏付ける新資料は見出されなかったものの、下絵の文様構成の通底に、円山応挙が確立した画面空間の三次元化という発想が受け継がれていることが明らかになった。今後は今回の考察によって得た方法論に基づき、近世から近代の服装について様々な視点から考えていきたい。

---

\*1) kondo@bunka.ac.jp

## 配当決定額

平成 20 年度	560,000 円
平成 21 年度	1,400,000 円
平成 22 年度	950,000 円
合計	2,910,000 円

## 研究の目的

本研究は、三井家伝来きもの型原寸下絵 29 件(表 1)と、これをもとに制作された三井家旧蔵小袖を資料として、近世・近代の服飾を取り巻く社会諸相を解明することを目的としている。

昭和 50 年、白畑よし・切畑健により 26 件の「下絵」の存在が確認された[1]。これまで、兵庫県大乘寺(応挙寺)が 19 件、文化学園服飾博物館が 6 件を所蔵し、前述の 26 件の内 1 件が所在不明とされてきた。平成 21 年度、大乘寺に未発表の下絵 4 件が存在することが明らかになったため、現時点では合計 29 件の下絵が確認されている。なお、平成 20 年度の報告書では当該下絵を「衣裳画」と表記したが、研究の進捗に伴い、以下の文中では「下絵」と表記する。

昭和 50 年当時、「波頭に飛鶴文様下絵」(表 1・No.12)には「地紅地黒とも 圓山画大海水靄」と記した墨書が添付されていた(現在その墨書は行方不明である)。下絵のかつての所有者である三井家が、円山派の始祖・円山応挙(1733~1795)の庇護者であったことはかねてより指摘されており[2]、そこから白畑は墨書にある「圓山」を応挙および円山派に連なる絵師と推定している。しかし、以降今日まで、「下絵」の制作者を推定するような具体的な論証はなされてこなかった。

公家や武家を主たる需要層とした土佐派・狩野派・琳派といった諸派の作品は、鑑賞に際して古典文化に関する教養が求められたが、それらとは対照的に、写実性を特色とした円山派は、従来の文化の担い手であった禁裏や寺社のほか、新興勢力である京都の富裕な町衆にまで幅広く好まれた。応挙の庇護者として最も知られているのは円満院祐常だが、三井北家四代当主高美との親交も、絵師と依頼主という垣根を越えた、極めて深いものであったと推測されている[3]。

一方、「現銀掛け値なし」という新商法で越後屋の業績を躍進させた豪商・三井家では、初代当主高利の時代にこそ芸事や宗教への耽溺・浪費を戒める気風があったものの、呉服・両替の両業績が伸びるに従い、歴代の当主は次第に文化人としての存在感を増していった[4]。このように町人が文化の担い手となった当時には、富裕な町人層からの奢侈的な商品の需要が市場となり得る程度あったと考えられる。職工人の技術を結集した越後屋が、彼らの嗜好を汲み取り、どのようにこれに答えていったのか考察することも重要であろう。

本研究では、円山派と豪商三井の協力によって生まれたと推察される同資料について、①「下絵」と円山派作品との比較、および描かれた意匠の分析を行う。また、②職人層が呉服商とどういった関係にあったのかについて越後屋呉服店所蔵文書から考察を行い、③同資料の成立背景と、そこから読み解ける近世服飾が育まれた環境の特質について総合的に考究してゆく。

服飾は服飾としてひとり存在するものではない。文化とは常に歴史背景や社会状況と共に語られるべきものである。服飾文化を、それを取り巻く同時代の社会背景から分析・検討するところこそ、本研究の目的と価値が存在する。以上のような分野横断的な試論を積み重ねることが、総合学としての服装学確立の礎となることを信じ、取り組んでゆくものである。

表1 下絵一覧

No	名称	所蔵
1	十二ヶ月風物文様	大乘寺
2	観世水に藤、秋草文様	大乘寺
3	八橋文様	大乘寺
4	岩山に松鶴、亀文様	文化学園服飾博物館
5	水流に小松、亀文様	文化学園服飾博物館
6	昔ばなし文様	文化学園服飾博物館
7	竹に鶯文様	文化学園服飾博物館
8	扇面流し文様	文化学園服飾博物館
9	四君子文様	大乘寺
10	松樹文様	大乘寺
11	竹文様	大乘寺
12	竹文様	文化学園服飾博物館、大乘寺
13	梅樹と遠山と岩文様	大乘寺
14	籬に梅樹文様	大乘寺
15	梅樹文様	大乘寺
16	花筏文様	大乘寺
17	桧垣に四季の草花文様	大乘寺
18	桜、菊、もみぢ文様	大乘寺
19	藤棚に流水、山吹文様	大乘寺
20	瀧に岩文様	大乘寺
21	波濤に飛鶴文様	大乘寺
22	山水、飛鶴、亀文様	大乘寺
23	亀に亀甲文文様	大乘寺
24	遠山と流水文様	大乘寺
25	立涌に秋草文様	大乘寺
26	四季耕作文様（仮称）	大乘寺
27	桜、もみぢ、秋草文様（仮称）	大乘寺
28	籬に菊文様	大乘寺
29	草藤文様	大乘寺

※下絵の番号及び名称は『三井家伝来円山派衣裳画』および、文化学園服飾博物館『三井家のきもの』と下絵 円山派がもたらしたデザインの世界』展図録[5]に依拠した。

## 研究の方法

・美術史、商工業史、文化史の各方面より調査活動を行う。

- ①各「下絵」と円山派作品の異同、および絵師の関与が指摘される小袖の類例との異同を明らかにしながら、近世美術史上における本資料の位置付けを考察する。

②三井文庫所蔵の江戸中後期の文書から、呉服の製作販売者である越後屋とその製作の様々な段階に技術を以って関わった御用職人との結びつきが、どのように形成されていたかを考察する。

③社会も文化も実物重視の傾向が顕現化した江戸時代にあつて、写実主義を掲げた円山派の画業が如何に捉えられていたかを文献資料から考察する。

- ・呉服店や着物製作に従事する人物を対象として聞き取り調査を行う。
- ・「下絵」をそのまま、あるいは「下絵」の制作当時に想定されていたであろうきもの姿を、図中に見られる指示書きなどから加飾を推測し、ポリエステル縮緬地にデジタルプリントした再現作品を製作し、きものとしての全体像をより深く理解するための一助とする。

## 研究の実施計画

### [20 年度]

#### ●方法

- ・コアメンバーでプロジェクトの推進を図り、研究例会を12月、1月、2月、3月に実施する。

↓

- ・現時点での研究水準が明確となり、世服飾を取り巻く状況に関する大まかな理解が共有される。
- ・新たな検討項目、分野が発見される。(サブグループの立ち上げも考慮)

#### ●調査

文化学園服飾博物館所蔵の「下絵」6件

- メンバーそれぞれがテーマに沿って、「下絵」と近世服飾を取り巻く状況を把握・整理する。

##### ①美術史

円山応挙以降、明治時代までの円山派絵師と三井家の歴代当主との関係性について整理する。

##### ②商工業史

越後屋呉服店にて販売された呉服は、京都とその周辺に住む職人の分業により製作された。17世紀末以降増加した需要に応えるため、予め加工代金を支払うことで腕の良い職人を囲い込んで御用に從事させたといわれる。こうした組織化の過程をより詳細に知るための資料を、とりわけ京本店所蔵分の中から探す。

##### ③文化史

円山派の祖である円山応挙の様式に影響を与えたものに本草学・博物学・名物学の隆盛があったと考えられる。その具体的状況をまずは文献から読み解く。さらに応挙の様式が時代の思潮の中でどのように位置づけられるのかを検証し、さらに円山派の展開を文化史の側から考えることを目指す。

### [21 年度]

#### ●調査

- ・兵庫県・大乘寺所蔵の「下絵」19件
- ・三井記念美術館所蔵の三井家旧蔵小袖
- ・京都国立博物館所蔵の円山応挙筆「下絵」
- ・斎藤光彌氏へのきもの下絵制作についての聞き取り調査
- ・宍倉ペーパーラボへ紙質調査を依頼
- ・株式会社千總への聞き取り調査

●20 年度の成果を踏まえ、各担当分野における研究活動を行う。

①美術史

「下絵」24 件の分類と、「下絵」と円山派絵師による白描の筆致の比較を行う。円山派絵師と三井家の関連調査の範囲を拡大し、円山派の絵師が小袖の下絵制作に従事した事例、または下絵師が円山派の門弟として学んだ事例について検討する。

②商工業史

呉服店の売り上げが減じ、それまでの越後屋と職方の関係に変化が生じたと推察される 18 世紀後半に着目。とりわけ関連記述がまとまって残る天明年間の文書を重点的に検討する。

③文化史

前年度の調査を継続するとともに、江戸前期からの文芸思潮を「写実」という観点から考察する。

●その他

- ・「下絵」をCGで画像合成し、または布地に転写した再現作品を製作し、より深い理解を得るための一助とする。
- ・定期的な勉強会の実施とともに、美術史的観点からの公開講座・講演会を2回程度開催する。
- ・個別に進めてきた研究成果を中間報告としてまとめる。

[22 年度]

●調査

- ・株式会社美裳三松への聞き取り調査
- ・類例作品として三井記念美術館所蔵の亀岡亀礼筆「猛虎図裂」

●20 年度、21 年度の成果を踏まえ、各担当分野における研究活動を行う。

①美術史

江戸から明治期にかけて、小袖意匠に絵師・画家が関与した類例を収集し、それぞれの制作背景を精査する。具体的には、宮崎友禅斎・尾形光琳の名前を冠した小袖意匠が流行した江戸中期、大名家の扶持を失った絵師が糊口をしのぐために工芸品製作に手を染めた幕末から明治初期、流行を作り出す目的で百貨店が画家や文化人を広報活動に動員した明治 30 年以降の三期それぞれについて検討する。

②商工業史

退潮期の越後屋と職方の関わりを考えるために、越後屋と取り引きのあった職方が越後屋から受けていた経営支援に注目し、その背景にあった「実質的支配」ともいわれる越後屋からの様々な影響力について考察する。

③文化史

円山応挙の「写生」については前年度にその特質が明らかとなった。またリアリティを求める動きは、近世に入って町人の経済力の伸張とともに見られるようになったことを元禄～享保期の文芸を中心に考察した。本年度は、応挙の生きた享保～寛政期を中心に博物学の隆盛や文芸の状況と応挙とのかかわりを考える。

●その他

- ・「下絵」をCGで画像合成し、または布地に転写した再現作品を製作し、より深い理解を得るための一助とする。

- ・勉強会を定期的実施する。
- ・個別に進めてきた研究成果を最終報告としてまとめる。

## 研究の成果

### [20 年度]

- 文化学園服飾博物館所蔵の「下絵」6 件の実見調査により、
  - ・大画面構図のものと仕込み絵風にモチーフを配したものの差が大きい。
  - ・一人の絵師の手になるものとは考えにくく、複数の絵師によって制作された可能性が高い。
 という知見を得た。
- 職人の囲い込みの過程を考察する中で、越後屋の経営状態が変化した 18 世紀後半の状況がまだ不明瞭であることが問題として意識された。関連記載の存在が予見される資料 14 件を複写し、翻刻作業を行った。

### [21 年度]

- 種々の聞取調査および復元調査、文献の調査により、
  - ・三井家旧蔵小袖のデザインには、円山応挙が日本画にもたらした、二次元における三次元的空間の描出を一個の作品として結実させるという革新性が、絵画と工芸という垣根を越えて取り込まれ、受け継がれている点を特徴としてあげることができる。
  - ・一点ものという性格上、原寸大のきもの下絵が制作後に残されていることは極めて稀である。
  - ・小下絵から原寸大まで、下絵の制作には分業制がとられていた。
 という知見を得た。
- 「八橋文様下絵」(表1・No.3)と「胴着」(文化学園服飾博物館所蔵)を資料として、在りし日の小袖の姿をCGで再現し、絵画作品との異同を考察した。その結果として、写実を特徴とする円山派作品には、文学的な主題の作例は乏しく、中でも「伊勢物語」に取材した「八橋図」は類例がないという知見を得た[6]。また、「瀧に岩文様下絵」(表1・No.20)をポリエステル縮緬地にプリントし、下絵制作時に想定されていたであろう小袖を製作した。
- 18 世紀後半、とりわけ天明年間を中心に検討を行い、越後屋による零細な職方に対する運営資金貸与が広く行われていたこと、支援を受けてこそ生業が維持される職方が多く存在したことが知られた。引き続き関連記載の存在が予見される資料を複写し翻刻作業を行った。

### [22 年度]

- 種々の聞取調査および復元調査、文献の調査により、
  - ・下絵について円山派の直接の関与をうかがわせるような決め手は見出せなかった。ただし全般に亘って、円山派のもたらした「写生」を中心とする新しい意匠が見られる。そこから円山派が近世後期のデザインの世界に及ぼした影響の大きさを指摘することができる。
  - ・近世におけるこのような傾向は、絵画や美術工芸の世界だけではなく文学や芸能などにも見出すことができる。それは、近世において儒学を基調とした個の尊重が浸透したこと、町人層が経済力をつけて台頭し現実を肯定、享受する姿勢が広まったこととかかわっていると考えられる。
 という知見を得た。

- 「波濤に飛鶴文様下絵」(表1・No.21)から、加飾後の様子をCGで再現、ポリエステル縮緬地にプリントし、下絵制作時に想定されていたであろう小袖の形に仕立てた。また引き解きの状態で保管されていた「猛虎図裂」をCGで画像合成し、文様の繋がり方から、きものであった当時の姿を復元した。その結果、従来考えられていた子供用の着物ではなく、成人用の羽裏であった可能性が高いという知見を得た。
- 「職方人数調書(本 1576-7)」と「植屋六左衛門年賦之願書(続 562-11)」(資料番号は三井文庫所蔵史料目録による)の検討を中心に、天明期の京本店が職方に対してなした経営支援と、そこに生じた実質的支配について考察した。越後屋からの支配は御用職方に対して均等に及ぶものではなく、その大きさは職方の経営状況と密接に関わるものであることが分かった。資料中に「下絵」として現れる絵付け専門の職方も、こうした組織化の枠組みを大きく外れることはなかったと推察される。

### おわりに

3年間の調査・考察から、下絵について円山派との直接の関わりは従来指摘されている以外の新資料を見出すことは出来なかった。下絵の書き入れも、大部分が加飾を指示する内容のものであり、あくまでも「下絵」として描かれたものであると考えられる。このことは、斎藤光彌氏ならびに両呉服店での聞き取り調査からも裏付けられた。

下絵に用いられているモチーフは必ずしも円山派の特徴である写実的なものではない。しかし、そこに描かれた「文様」の構成は極めて革新的であり、円山派が近世後期にもたらした「写実」の影響をはっきりと看取できる。これらの下絵が実際にどのような目的(着用者・着想意図)の為に制作されたのかは、別に考察されるであろうが、描かれたモチーフや文様の配置などから見て、武家の小袖とは一線を画すと考えられる。これらの下絵は近世の、町人の経済力の伸張という大きなうねりの中でとらえるべきものであろう。

当該研究を始めるにあたり、「服飾文化を、それを取り巻く同時代の社会背景から分析・検討するところこそ、本研究の目的と価値が存在する。以上のような分野横断的な試論を積み重ねることが、総合学としての服装学確立の礎となることを信じ、取り組んでゆくものである。」と述べた。絵画と服飾の中間地点に存在するような「下絵」は、まさに分野横断的な試論に相応しい対象であったと言える。

最後に「服装学」の枠組みの中で、今後の課題として残されたことを確認しておきたい。今回、本研究では、「下絵群」は統一的な意図の下に制作されたものではない、という結論に到達した。今後は、能装束(表1・No.2)や子供のきもの(表1・No.6)といった特殊な形状のものから、個々の対象により深くアプローチしていきたいと考えている。また、江戸時代の商家と職方の関係について研究を重ねてきたが、今後は明治期以降にまで視野を広げ、百貨店となった三越が図案課として画家を抱えていた点について調査を行う予定である。さらに応挙が活躍した江戸中期から後期にかけての社会的・文化的状況の中で、応挙の画業を位置づけていくことが必要であろう。例えば、上田秋成は随筆『胆大小心録』で応挙に言及していることで知られている。一方秋成の『雨月物語』をはじめとする怪異譚の流行は、享保の改革で縛り付けられていたエネルギーの噴出と捉えることもできる。そういった動きと、応挙の「写生」がどのように関わっているのか、といったことがらは、服飾とは直接関係していないように見えるが、服装学としては欠くことのできない視点であろう。

## 主な発表論文等

### [雑誌論文]

近藤尚子「近松の呼びかけ—感動詞「コレ」を中心として—」『国文学研究』160号(2010)

田中直人「三井越後屋呉服店の職方組織—天明期の調書と年賦願をめぐって—」『文化女子大学紀要 人文・社会科学』第19集(2010)

樋口一貴「亀岡規礼の描繪小袖—三井家と絵師の関係の一断章」『小林忠先生古稀記念論文集(仮称)』(2012)掲載予定

### [図録]

佐々木丞平「写生的デザインへの転換—応挙の役割とその後の展開—」

樋口一貴「“きもの型原寸下絵”に関する絵画史的研究序説」

(共に、文化学園服飾博物館『三井家のきものと下絵 円山派がもたらしたデザインの世界』展図録,2009)

### [学会発表]

田中直人「三井越後屋の職方支配—幕末期の金銭貸与を巡って—」

岡島奈音「三井家伝来きもの型原寸下絵の意匠構想—八橋文様下絵に関する考察—」

(共に、ファッションビジネス学会 2009 全国大会)

### [口頭発表]

佐々木丞平 服飾文化特別講演会「写生的デザインへの転換—応挙の役割とその後の展開—」

(文化女子大学文化ファッション研究機構主催,2009)

### [その他]

文化女子大学文化祭において、服飾文化共同研究拠点の成果展示として、「波濤に飛鶴文様下絵」(表1・No.21)から復元した小袖を展示した。

## 参考文献

1. 白畑よし、切畑健:「三井家伝来圓山派衣裳画」, 紫紅社(1975)
2. 河野元昭:「応挙と三井家」『文部省平成元年度～四年度科学研究費補助金(一般研究 A)研究成果報告書 狩野派を中心とする官学派の研究』東京大学美術史学研究室(1993)
3. 樋口一貴:「新出の円山応挙筆「三井高彌像」」『三井文庫論叢』No.32(1998)
4. 三井記念文庫:『三井家文化人名録』(2002)
5. 文化学園服飾博物館:『三井家のきものと下絵 円山派がもたらしたデザインの世界』展図録(2009)
6. 佐々木丞平:『古画総覧 円山四条派』1～6, 国書刊行会(2000)を資料として調査を行った。